Japan Information-Culture Society

研究論文

多重文脈性を「まとう」ツールとしてのケータイ

Mobile Phones as Tools for 'Wearing' Multi-Contextuality

中村 隆志　Takashi NAKAMURA
新潟大学人文学部
Faculty of Humanities, Niigata University

要　旨

「ケータイのディスプレイを見る行為」は，ケータイが本来持っている通信機能を越えて，現実空間での非言語的コミュニケーションに様々な役割を果たしている。この役割をさらに明らかにするため，大学生にアンケート調査を行った。公共空間において，連絡すべき用件があるわけでも，着信があるわけでも，すぐに見たいコンテンツがあるわけでもないのに，ケータイを取り出したくなるような経験を思い出してもらい，その理由を尋ねた。得られた回答より，「ケータイのディスプレイを見る行為」は，従来から存在する小物と同じようにケータイを利用する場合と，「誰かとつながっていること」を演出する狙いでケータイを使用する場合との，大きく２通りに分けられた。もうひとつの調査では，公共空間でのケータイあるいは他の小物の利用意向を尋ねた。その結果，被験者は，「誰かとつながっていること」を周囲にアピールする必要性が相対的に高い状況において，ケータイを取り出して操作する傾向にあった。この使用法は，ユーザが多重文脈性を「まとう」かのようにケータイを利用することがあると解釈可能であり，現代の対面的コミュニケーションに影響を与えていると考えられる。

Abstract

The behavior of looking at "keitai" (mobile phone)displays' has played various roles in non-verbal communications in real spaces. To understand these roles, I administered one questionnaire to university students about the reason why they spontaneously look at "keitai" displays in public places, even when they have no business to communicate, no actual call or no web page to check in a hurry. The results showed that "keitai" usage can be largely separated into two cases; one case in which users handle "keitai" like conventional small objects that existed from the past, and another case in which users try to make others around them believe that they are 'communicating with somebody in another place.' Furthermore, I administered another questionnaire, in which I asked them to select whether they would handle a "keitai" or other small objects in a public place. The result indicated that "keitai" users tend to operate their own "keitai" in order to make others around them believe that they are 'communicating with somebody in another place.' Such the way to use "keitai" can be interpreted as the users occasionally operate "keitai" like 'wearing' Multi-Contextuality. It should be considered that the usage fairly affect our face-to-face communication today.

1. はじめに

2007年1月，携帯電話とPHS（以降，両者合わせて「ケータイ」と表記する）を合わせた国内契約数は1億件を突破したが，同年12月にはPHSを除いた携帯電話だけでも，その契約数は1億件を超えた[1]。NTTドコモは，iモード開始以前の携帯電話を通信インフラ，1999年以降2004年までのものをITインフラ，おサイフケータイ開始の2004年以降は生活インフラと位置づけ，生活やビジネスのあらゆる場面で役立つツールとしてのサービスを展開するとしている[2]。ほとんどの人が持ち歩き，生活インフラと位置づけられるほどケータイは進歩しており，近年では，一歩外に出れば，ケータイを利用している人を非常に多くの場面で見かけるようになっており，そのことが当たり前になっている。

2004年以降のケータイ端末では，高精細カメラ，外部メモリ，ICカード（Felica），GPS，ワンセグ，国際ローミングといった機能の搭載率が年々高まっており，ケータイキャリア各社やコンテンツプロバイダ(1)はサービスの質を向上させる競争を繰り返している。これらの機能とサービスの今後の拡充は，外出先でのケータイ利用を現在以上に促進すると予想される。しかし，2006年に行われた調査結果では，ケータイが依然，その場に居ない人とのコミュニケーションツールとして，最もよく利用されていることを示している。『モバイル社会白書2007』[3]において紹介される「平成18年度一般向けモバイル利用調査」では，2006年12月にWeb調査を用いて，15歳以上の男女2,201人（男性51.3%，女性48.7%）にアンケート調査が行われた。この調査における「携帯電話(2)に対して感じる魅力（複数回答）」という設問に対しては，順に「いつでも，どこにいても緊急の連絡ができること」「いつでも，どこにいても連絡が受けられること」「友人・家族などと簡単に連絡がとれること」が上位3位の回答であった。また，「携帯電話で利用する機能・サービス（複数回答）」という設問に対しては，順に「通話」「メールの受信」「メールの送信」(3)が上位3位の回答であった。つまり，ケータイはその場に居ない人と連絡をとれるコミュニケーションツールとしての機能が最も重要視されている。

一方，中村[4]は，ケータイユーザが，連絡すべき用件があるわけでも，着信があるわけでも，見たいコンテンツがあるわけでもないにも関わらず，意図的にケータイを取り出して，そのディスプレイを見る（以降，このことを「「用もないのに」ケー

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

タイのディスプレイを見る」と記述する）場合があることを指摘した。とりわけ，知らない他人や顔は知っているが親しくない知人と共に居合わせるような場面において，敢えてケータイのディスプレイを見る行動をして，顔を合わせるのを避けたり，忙しそうな素振りをするような利用法が多く使われていることを示した。また，ユーザは，「ケータイのディスプレイを見る行為」が周囲に居る人々を遠ざけるような効果があることがわかっていて，必要に応じて敢えて行っていることを示した。つまり，多くのユーザが，周囲に居合わせる人間との関係を非言語的[4]に調整するために，ケータイを日常的に利用している。このことは，ケータイが，その本来の機能を越えた使い方をされていることを意味する。

90年代以降，ケータイを公共空間で利用するユーザとそこで行われるコミュニケーションは，批判的な受け止め方をされることが多かった（詳しくは[5]）。ユーザがケータイを利用している姿は，直接的なコミュニケーションの糸口が乏しいため，周囲の者に閉鎖的な印象を与えることが批判の理由の一つであった。しかし，多くの言説の中に，ユーザが閉鎖的な態度を自ら演出したり，現実空間の状況を調整するために意図的にケータイを利用する場合がある，という観点での分析はなかった。ケータイを利用する行為やそれを必要とする心理に対する考察は，ユーザがケータイ本来の機能を求めていることを前提としていた。が，もしも，ユーザが「用もないのに」ケータイを意図的に利用する場合が少なからず在るならば，観察記録のままからの分析には齟齬が生じる可能性がある。「用もないのに」ケータイを利用することについて，その意図と利用場面を改めて調査する必要がある。

本稿では，2つのアンケート調査を取り上げ，その分析に基づいて，ユーザが「用もないのに」ケータイを必要とする理由やその利用傾向を述べると共に，ケータイを通じた現代のコミュニケーションの様相について考察する。第1のアンケート調査では，外出時に「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る行為をする理由を被験者に尋ねて，従来からある小物のようにケータイを利用する場合と，即時連絡可能なコミュニケーション端末ならではの利用法を用いる場合の2通りがあることを分析的に示す。とりわけ，後者の利用法は，従来から在るものとの代替が不可能であるような新しい利用法であり，「今ここに居ない誰かとつながっていること」あるいは「自分にとって，いつでもつながることができる誰かが居ること」を周囲の人々にアピールするために利用されている。第2のアンケート調査では，ユーザに公共空間での場面別に「ケータイのディスプレイを見る行為」の利用意向を尋ねて，ある特定の場面で利用する人の割合が高くなることを示す。被験者への質問文に用いた場面の特徴から，「ケータイのディスプレイを見る行為」は「誰かとつながっていること」または「つながっている誰かが居ること」を周囲の人々にアピールする意図を持って行われ得ることが示唆される。このような「ケータイのディスプレイを見る行為」の利用傾向を多重文脈性（例えば[6]）の観点から捉え直し，ケータイという情報通信機器がもたらした現代のコミュニケーションの様相を考察する。

2.　ケータイのある安心とケータイのない不安

ケータイを持ち歩くことが日常化する一方，ケータイを持ち歩かないことはどのように捉えられているのだろうか。先述した『モバイル社会白書2007』[3]における調査の中で，「携帯電話を利用するようになって感じること（複数回答）」という設問に対して，「いつでも連絡できるという安心感を持てるようになった」という回答者が「よく感じる」「時々感じる」の2つの回答件数を合わせて77.7%，「携帯電話を忘れて外出すると不安である」という回答者が「よく感じる」「時々感じる」を合わせて63.0%，「携帯電話を忘れて外出すると不便である」という回答者が同じく77.7%であった（有効回答数1,962人）。

また，2007年4月にインフォプラント社（2007年12月現在ヤフーバリューインサイト社）は，iモードの公式サイト「＊とくするメニュー」を活用して「外出時の持ち物（携帯電話・現金を除く）」に関する調査」を行った[7]。回答者はiモードユーザの7,038人（男性35.3%，女性64.7%）である。ここでの調査報告において，携帯電話を持ち歩かないと不安を感じる割合は「持ち歩かないととても不安」「持ち歩かないとやや不安」を合わせて，全体の80.9%を占めた。男女別では，不安を感じる割合は男性が75.2%，女性が84.0%となり，女性の方が携帯電話を持ち歩かないと不安を感じる人が多かったことが報告されている。

ケータイを持ち歩かないことに不安を感じる人の割合について，上記2つの調査では，前者が63.0%，後者が80.9%と大きな隔たりがある。この差は主に後者の調査回答者の性別・年代の偏りにより発生したと考えられる。前者の調査では，性・年代ごとに回答者数はほぼ均等であるが，後者の調査では，20代女性と30代女性だけで3,653人の回答者がおり，女性回答者の約8割，全体回答者の半数以上を占めている。この女性20代30代の世代が，共に高い割合で，「とても不安」あるいは「やや不安」という回答をしているため，女性全体としても，男女合わせた全体としても，不安を感じる人の割合が高く計算されたと考えられる。また，前者の設問では，「不安」と「不便」を答えとして分けていることも，「不安」の回答者を減じる一因になっていると推測される。2つの調査結果は見かけの数値は大きな隔たりを示しているが，異なる調査環境が原因でもたらされた差であり，刮目すべき事柄ではない。これらの調査結果で注目すべきことは，ケータイを持ち歩かないことに対して，「不便である」ことを通り越して「不安である」と感じる人が少なくとも全体の6割以上の多数にのぼること，特に20代30代の女性にとっては，その不安を感じる割合が顕著に高いことである。

この不安をもたらした原因として，ケータイを持ち歩かないことで緊急事態への対応が遅れてしまうことへの憂慮，あるいはケータイでの連絡を前提にした家族・友人関係が損なわれることへの憂慮などが考えられる。これらの憂慮は，ケータイのある安心の裏返しでもある。

本稿では，さらにもうひとつの理由をその不安をもたらした

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

原因として仮定する。それは，ケータイによる周囲への自己演出機能が失われることへの不安である。一例を挙げて，平易に表現すると，「ケータイがあれば，外出中でも忙しそうなフリが出来るのに，ケータイが無いとそれができないこと」への不安である。

NTTドコモは2007年2月より富士通製携帯電話F703i，2007年7月より同F704iを発売している（2007年12月現在）[8]。これらの端末機器にはイミテーションコールという機能が付属している。イミテーションコールの機能は「夜道で不審者に後をつけられたときなどに着信音を鳴らして“だれかとつながっている”ことを装う機能。着信音を鳴らした後に，実際に端末から話している声が聞こえるようになり，よりリアルにつながっているように見せかけられるようになった。」と説明されるとおり，ケータイで誰かとつながっている素振りをすることを提供しており，ユーザを安全に保つことが期待されている[9]（同様の機能は「フェイク着信」という名称で，au KDDDIが発売するシャープ製W61SH（2008年1月発売），京セラ製W61K（2008年2月発売）などにも搭載されている）。この機能が物語ることは，実際にはつながっていなくても，ケータイでつながっている素振りをするだけで，連絡中で忙しそうであると周囲の人に印象づけたり，近寄りがたいと感じさせたりすることができることである。また，現実の日常空間では，このような機能が必要になる場合が少なからず起きるであろうことも同時に示している。

中村[4]は，連絡すべき用件があるわけでも，着信があるわけでも，見たいコンテンツがあるわけでもないのにケータイを持ち出したくなる，すなわち，「用もないのに」ケータイを持ち出してディプレイを見たくなるような日常の場面とユーザの欲求を取り上げて考察した。ユーザは，その場にいない人とのコミュニケーションツールとしてケータイを用いながら，同時に，現実空間に居合わせる人との関係を調整するためのツールとしても活用している。ケータイが現実空間で周囲との関係を調整しているのならば，ケータイがないことは，その調整ツールなしで周囲と相対することを意味する。よって，ユーザ達の中には，「ケータイを持ち歩かない不安」を感じる者が出てくることは充分に考えられる。インフォプラント社の調査報告[7]では女性の方が不安に感じる割合が高かった（モバイル社会研究所の調査報告[3]には，男女差は掲載されていない）。このことは，一般に公共空間で弱い立場にあると言われる女性の側の方が[10]，公共空間でケータイをより必要としていることのあらわれであると推察できる。

3. 「用もないのに」ケータイの理由

「ケータイのディスプレイを見る行為」は，一見すると目前の人に閉鎖的な印象を与えるが，ケータイユーザ自身も他のユーザの行動を観察することを通して，そのことを知っている[4]。多くのケータイユーザが，ケータイのディスプレイを見る行為が周囲に居る人々を遠ざけるような効果があることがわかっていて，なお，「用もないのに」ケータイを取り出している。このことは，ユーザ達がケータイを取り出したくなる原因にリアルタイムに直面していることを推察させる。

「用もないのに」ケータイを取り出してしまう行為を理解するには，ケータイの持つ特徴と合わせて考察する必要がある。前章で述べたような，誰かとつながっている素振りをするための行為の場合もあるし，それ以外の目的をもった行為である場合もあるだろう。この違いは，後述するように，その場に居ない誰かと連絡をとるためのコミュニケーション端末であることを前提とするような利用法と通信機能が無くても可能な，いわば，従来から在る小物としての利用法とに分ける形で分類可能である。この2つの利用法の違いを明確にするため，以下の調査を行った。

3.1 ケーススタディ1：「用もないのに」ケータイの理由調査

ケータイを利用する行為を理解するには，ユーザを注意深く観察せねばならないが，一方で，観察者の凝視する態度が，「観測問題」と同様に，ユーザを刺激してしまいかねない。よって，日常的にケータイを利用するユーザの経験を問う必要がある。アンケート回答者を募り，以下のような手順で調査を行った。

3.2 調査概要

第1回調査

時期：2006年12月

対象：新潟大学生（18～22歳） 27人（男13，女14）

第2回調査

時期：2007年7月

対象：新潟大学生（18～22歳） 63人（男24，女39）

2回の調査に被験者の重複はない。第1回，第2回とも，被験者を一同に集めて集合的な説明を行った。回答はケータイを持つ者のみに求めた。中村[4]で行った調査の要約を説明し，「用もないのに」ケータイを利用したくなる場面について，自らの経験を思い浮かべるように依頼した。その上で，「不特定のまったくの他人」の前で（独りで外出中，通学途中の路上，スーパーマーケット，繁華街の路上，公共交通機関の駅構内など，不特定の知らない人が多い中で独りで居る場合），あるいは「特定のまったくの他人」の前で（独りで外出中，電車内，エレベータ，レストランなどの限られた空間内で，たまたま近くに居合わせた知らない人と比較的近い距離でしばらく居合わせる場合），自ら連絡をとる必要性もなく，着信もなく，見たいコンテンツなどがないにも関わらず，「ケータイのディスプレイを見る行為」をした経験とその理由について自由記述の形式で述べさせた。空欄のまま提出した者もいたが，最大で4件の場面と理由の記述を書いた者もいた。被験者90人から，合計151件の場面と理由の記述を得た。

3.3 結果

最も多かったのが「ヒマだから」「やることがなく手持ちぶさただったから」あるいはそれに類する答えであった。また，たまたま手近に位置していることを使用する理由として挙げて

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

いるものが多くいた。一方で，コミュニケーション端末としての機能がついているからこその有効さを理由として述べている者もいた。すなわち，得られた記述を大きく分けると，すぐ身近にあって取り出しやすい「小物としてのケータイ」の側面を活用する場合と通信機能があるからこそ可能な「コミュニケーション端末としてのケータイ」の側面を活用する場合の2つに分けることができた。以下に代表的な答えを5つずつ列挙する。全ての例は被験者の回答の一つを写したものである。

A:「小物としてのケータイ」利用

a: ただなんとなく手元にあったケータイに手が伸びたから
b: 時間が急に気になったから
c: 勉強するには時間が短いから
d: ガラの良くなさそうな人が目の前に来て，目を合わせるとまずいような気がして
e: （電車内で）自分は目の前の人に興味を持っていないと知らせるため

B:「コミュニケーション端末としてのケータイ」利用

f: 夜道一人で歩いているとき，同じ方向らしき人がずっと後ろにいて，少し怖かったので，いつでも連絡できることをアピールするため
g: 夜，学校帰りの路上で，2軒隣の家の人と会い，挨拶したが，帰る方向が同じなので，一定の間，近くに居なければならず，場が持たなくなったため
h: （電車内で）席を替わるのが難しい状況で，近くに居る人がいきなり独り言を言い出して，気持ち悪くなったから
i: 一人で繁華街に来ているとは思われたくなかったからだと思う
j: ヒマな人と思われたくない，ひとりぼっちと思われたくない

3.4　2つの利用法について

各例の区別は，基本的に通話・通信機能がないような，他の持ち歩き可能な小物で代替可能かどうかをその分別基準としている。持ち歩き可能な小物はケータイ出現の遙か以前から存在しており，日常の外出時の服装や鞄のスタイルやデザインを含め，小物を利用する習慣や文化は，現代の我々に長く定着していると言えるだろう。その上で，ケータイがそれらの小物と同様の使われ方をしているのか，ケータイ出現以前には無かった新しい使われ方をしているのかを考察する必要がある。

A:「小物としてのケータイ」利用について

理由例a-cについては，手元にあり，時刻を知ることができて，短時間の暇つぶしができる，という使用理由であり，従来型の小物を手にとる理由と変わりはない。また，理由例a-cにおいて共通するのが，周囲の人間の視線やそれらの人に与えてしまう印象への配慮が，表現の中に見られない点である。多くの場合，ケータイのディスプレイを見る行為は，マナー違反とされることはほとんどなく(5)，周囲に対して悪影響を与えない無難な行動の選択肢内に収まる。理由例a-cの文面は，周囲に対して大きな影響を与えない性質のままに，周囲の人々への配慮を含んでいない。

一方で，理由例d-eでは，ケータイのディスプレイを見ることで，周囲の人に視線を持って行くのを防ぎ，未然にトラブルを防ごうという意図が直接的な理由として挙がっている。ここでは，ユーザは，ケータイを利用する者が，周囲にどんな影響を与えるかを予想していて，かつ，その効果を利用している。つまり，ケータイは周囲の人との関係を非言語的に調整するために意図的に使用されている。

理由例a-eを通して，「小物としてのケータイ」の使用法は，腕時計，手帳，文庫本などの小物で代用できるものである。人の多い場所では，ケータイのない時代から頻繁に行われていた行動であると推測できる。

B:「コミュニケーション端末としてのケータイ」利用について

理由例fでは，回答者は，夜道の危険性を認識した上で，後ろを歩く人物を間接的に威嚇するためにケータイを取り出している。ケータイを利用することで，後ろの人物に「即時連絡可能である」ことを知らしめることを実現している。また，ケータイは「不意の対応」に迫られることが頻繁に起こるため，いつケータイを取り出しても不思議ではないことが利用されている。

理由例g-hでも，回答者はケータイの「不意の対応」に迫られうる機能を利用していると考えられる。回答者自身の注意関心が，現実空間ではなく，掌中のケータイに向いていることをアピールする点では，「小物としてのケータイ」の利用例d-eと同じである。しかし，理由例g-hでは，注意関心を移行する必要性が周囲にも明らかであるため，他の小物を持ち出すことは故意に閉鎖的な行動を選択していると印象づける可能性がある。ケータイであれば，現実空間での出来事に業を煮やして故意に閉鎖的な対応をとったのか，「不意の対応」を迫られたが故に注意関心がケータイに移ったのかは周囲からはわからない。回答者は，ケータイを取り出すことで，あえて「故意に」注意関心を小物に移したわけではないことを，「意図的に」アピールすることを実現していると考えられる。このことは，ケータイが「暴力的メディア」[11]として，ところかまわず無遠慮に介入してくる性質を，逆に利用しているとも言えるだろう。

理由例iでは，待ち合わせ場所で待つ回答者は，自分と待ち合わせをしている連れの者が居ることを周囲にアピールしている。このことは，待ち合わせ場所に居た回答者が，多くの人々の視線を受けていること，その視線に対して何からの対応が必要であると感じたことを示している。ケータイは，その使用者の人間関係や社会性の一端を周囲の人々にアピールするためにも利用されている，と推察できる。

理由例jを述べた回答者も理由例iと同様に，即時連絡可能であるケータイを持ち出すことで，自らの人間関係や社会性の一端を周囲にアピールしている。この回答者は「誰かとつながっている」ということよりも，むしろ，「自分には，いつでもつながることが出来る相手が居る」（それ故に孤独ではない）ことをアピールしている。このことは，回答者が孤独な人物，寂

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

しい人物，と周囲に印象づけるのを警戒していることを同時に示している。

理由例 f-j に共通するのは，「私が即時コミュニケーション可能な端末を持っていること」を現実空間の周囲の人にアピールするために，ケータイを使用している点である。このアピールは非言語的に行われる。さらに，コミュニケーション端末を持っていることだけに留まらず，「私は手にしているこのケータイを通じて，今ここに居ない誰かとつながっている」「私には，いつでもつながることができる相手が居る」ことをわかってもらうことを期待していることが推察される。

3.5 考察－「用もないのに」ケータイを取り出す狙い

大きく２つに分けた理由例の分析から，「用もないのに」ケータイのディスプレイを見る行為にも，「小物としてのケータイ」利用と「コミュニケーション端末としてのケータイ」利用とでは，その狙いが大きく違うことが推察できる。「小物としてのケータイ」利用では，ケータイが最も手近な小物の一つになったことが利用されている。被験者は，自らの暇つぶしや手持ちぶさた解消をするために，あるいは，自分が関心のあるものに集中する素振りを行って，意図的に周囲から目をそらすためにケータイを利用している。この利用法では，自らの感興のためと，周囲の他人との関係調整を非言語的に行うため，といった大きな狙いの違いはあるが，コミュニケーション機能が付属していない小物でもその狙いが達成できる点で共通している。

「コミュニケーション端末としてのケータイ」利用では，ケータイが持ち歩き可能な個人専用の通信端末であることが利用されている。被験者は，即時連絡可能であること，不意の対応でやむなく周囲から目をそらしていること，連れの友人とまもなく合流予定であること，孤独な人物ではないことを周囲にアピールするためにケータイを利用している。被験者は，通信回路が使用可能であることを発展させて，通信回路の先に誰かがいることを，つまり自分の人間関係や社会性そのものを周囲に向けて非言語的にアピールすることを狙いとしている。この利用法はケータイがコミュニケーション端末であるからこそ，ディスプレイを見る行為だけで実現可能である。また，ケータイが広く普及しており，各人各様の人間関係の一端をケータイが媒介する現代コミュニケーションの様態が，この利用法の背景にある。

非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」[4] は，「小物としてのケータイ」の２番目の利用法と「コミュニケーション端末としてのケータイ」の利用法との，大きく２つに分類できるが，各，その狙いに違いがある。この狙いの違いをもたらした原因は，ユーザが置かれている状況にあると考えられる。

4.「誰かとつながっていること」のアピール

前章でのケーススタディでは，「用もないのに」公共空間でケータイを取り出してディスプレイを見る理由を質問した。その結果，従来型の小物使用と同じような利用法と，「誰かとつながっている」ことをアピールするようなコミュニケーション端末ならではの利用法があることを示した。本章では，後者の利用法が，特異な回答者による例外的な答えではなく，ある程度（ここでは，地方大学の学生の）一般的な傾向であることを量的に証示する。

4.1 対面的かかわりとケータイ

公共空間において，直接面識のない人々や親しくない人々を前にして，「外部との連絡可能性があること」，「不意の対応に迫られ得ること」，「孤独な存在ではないこと」をわざわざアピールする理由は何だろうか？様々な理由が考えられるが，ここでは，直接面識のない人々や親しくない人々との間に起こり得る「対面的かかわり」に対する警戒感をその動機の一つとして捉えよう。

ゴフマンは，同じ空間に居合わせた二人（あるいは，二人以上の人々）がお互いに一緒になって単一の相互行為（例えば，世間話，食事，ある種のゲームなど）を行うようになり，それを維持しようすることを「対面的かかわり」（あるいは「出会い」）と呼ぶ。一般に人々は対面的かかわりを求めていると同時に用心深くもある。一度始まった対面的かかわりは，行為者間にある種の相互義務をもった絆を確立させるため，場合によっては，行為者に大きな不利益が発生することがあるからだ。また，対面的かかわりをもった行為者達は，お互いの正式な承認なしには解放されにくくなるため，いとまごいをすることが困難になる場合があるとゴフマンは述べる [12]。つまり，公共空間に居合わせた人が，何らかのきっかけで周囲の人と会話などを始めたと想定する時，そのお互いの協同的な行為を果たしてうまく終了させることができるかどうかが心配になり，結果として，公共空間にいる人は用心深く振る舞う必要があることを意味している。

公共空間において，このような「対面的かかわり」が起こることに対して，ケータイは，ユーザが出会うであろう困難を軽くすることが期待できるだろう。ユーザがケータイを使用する素振りを見せることで，つながっている誰かが居ることをアピールできるため，周囲から気軽に声をかけにくくすることができる。また，たとえ「対面的かかわり」が起きたとしても，不意の対応に迫られたことをアピールすれば，強制的に「対面的かかわり」を終了させることができるため，ユーザは任意のタイミングでいとまごいが出来る。コミュニケーション機能のない従来型の小物では，この役は果たせない。公共空間で「対面的かかわり」が起こる予感がする場合，その用心のために，ユーザが「用もないのに」ケータイを取り出す頻度は高くなると予測できる。

一方で，公共空間に居合わせる人々の間で，たとえ「対面的かかわり」が起きたとしても，その状況の性質から，あるタイミングで強制的に対面的かかわりが中断されるような状況が考えられる。例えば，面会のための待合室で順番に呼ばれるのを待っているような場合である [12]。このような状況では，待っている人同士で起こる「対面的かかわり」は，順番が来た時点で，確実に打ち切ることができるため，用心深くなる必要性は比較的小さい。「用もないのに」ケータイを持ち出す必要は，対面

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

的かかわりを強制終了させる契機がやってこない状況と比べて高くはないだろう。よって，このような場合には，ケータイを取り出す頻度は用心深さが必要な場合に比べて相対的に低くなると予測できる。

以下のケーススタディでは，用心深さの必要性が，相対的に高い場合と低い場合を比較して，ケータイの利用頻度を調査した。

4.2　ケーススタディ２：待ち時間をやり過ごす小物調査

モバイル社会研究所による「平成18年度一般向けモバイル利用調査」結果に依れば，携帯電話を利用（通話，メール，コンテンツとも）する場面（複数回答）で一番頻度が高いのは「待ち時間（電車やバス，人との待ち合わせなど）」であると報告されている（通話，メール，コンテンツの順に，61.4%，71.4%，59.4%）[3]。この結果を受け，最もケータイの利用頻度が高いとされる「待つ」行為と場面に注目する。

アンケートで想定する場面には，「人が大勢いるところで，独りで待つ場面」をとりあげた。つまり，退屈でひまつぶしが必要であり，周囲の人と顔や目を合あわせないようにしたくなるような状況である。それらの典型的な場面を回答者に推定させるような文面を用意した。回答者がその場面に立った場合，ケータイを取り出してディスプレイを見る行為をするか，それ以外の行動をとるかの意向を聞き出し，場面とケータイ利用との相関を見ることが出来るようなアンケートを考案した。

4.3　調査概要

時期：2007年7月

対象：新潟大学生（18～22歳）　63人（男24，女39）

調査時期と対象はケーススタディ１の第２回調査と同じである。同様に，被験者を一同に集めて集合的な説明を行った。回答者はケータイを持つ者のみである。ケーススタディ１との違いは，典型的で具体的な場面に居ることを想定してもらう点とそこで採るであろう対応を選択肢から選び出してもらう点である。各設問ごとに，文面に描かれる場面に自らが居ることを想定させ，そこで行うであろう行動，あるいは利用するであろう小物を選ぶように依頼した。選択肢は複数選ぶことが可能であること，「特に何もしない」という選択肢があることを説明した。実際の調査では，ダミー的なものも含めて17問の設問を順不同で用意したが，本報告で取り上げるのは以下の４問である。それぞれ，独りで退屈で，暇つぶしを求める可能性が高く，他人の視線にさらされやすくて，居心地が良くない状況である点が共通している。

設問1：一人で市役所や役場にでかけた時，窓口前で込み合った座席で待っている場合

設問2：一人で人気のラーメン屋に入ると，知らない人とテーブル席で相席にされた場合

設問3：仲の良い友達がいない講義室で，一人で講義が始まるまで待っている場合

設問4：人通りの多い待ち合わせ場所で，友達を一人で待っている場合

これらの状況に対して，採るべき行動，利用する小物の選択肢は以下の14通りである（順序は実際のアンケート文面のままである）。選択肢は調査報告[7]で呈示された「持ち歩く小物」を参考にしながら，使用者の注意を一定時間ひきつけるようなものを取り上げている。

A.　文庫本・教科書などを読み始める
B.　雑誌・マンガなどを読み始める
C.　新聞を広げて読み始める
D.　手帳を見る
E.　腕時計を見る
F.　ケータイのディスプレイを見ながら操作する
G.　ケータイで通話を始める
H.　ポータブルプレーヤー（ケータイでも可）で音楽を聴く
I.　たばこを吸う
J.　カガミを見る
K.　寝るフリをする
L.　うつむいたり，誰もいない方向を向く
M.　特に何もしない
N.　その他

4.4　結果

回収した結果を図１に提示する。横軸に各設問に描かれた状況を番号順に並べ，全回答者中から各選択肢を採る人の割合（百分率）を縦軸にプロットした。グラフには，４つの設問を通して，最も頻度が高かった選択肢の上位５位までを表示している。

各設問とも，最も採用される頻度が高かったのは，選択肢Fの「ケータイのディスプレイを見ながら操作する」であった。この「ケータイのディスプレイを見ながら操作する」に注目した結果において，設問1，2の2問をまとめたグループと設問3，4の2問をまとめたグループの間で，選択肢Fを採用する割合に明瞭な差があった。設問1と2については，選択肢Fが採用された割合は約5割であったのに対し，設問3と4については，選択肢Fが採用される割合は約8割程度であり，設問1，2のグループと設問3，4のグループでは，利用者の割合に明瞭な差がある。

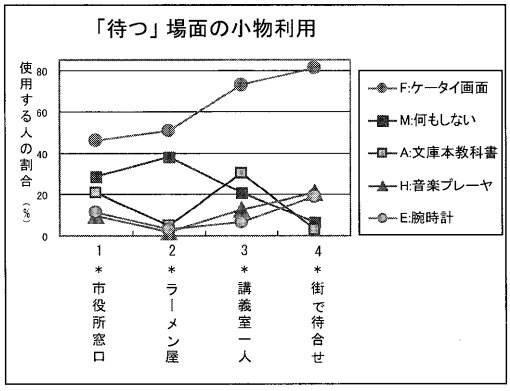

図1：待ち時間をやり過ごす小物調査結果

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

4.5 「待つ」状況の違いとケータイ利用頻度

各設問は，公共空間で他人の視線にさらされやすい中にあり，独りで退屈に待っている状況，という点では等しい。しかし，2つのグループの選択肢Fを採用する割合の差は，この2つのグループが描く状況における「ケータイのディスプレイを見て操作する」行為の意味が違っていることを示している。

設問1，設問2での状況では，その空間にいる人々が窓口で所用を足したり（設問1），彼（女）らに食事が運ばれてくる（設問2）タイミングが，順番にまわってくる環境にあり，肝心の所用（手続きや食事）が始まるタイミングと終了するタイミングが，その場の人々それぞれで異なっている。このような状況で待っている場合では，たとえ近くに居る知らない人と「対面的かかわり」が起きて，会話が始まったとしても，どちらかが呼ばれた時点や食事が終わった時点で，「対面的かかわり」を打ち切ることができる。この場合，当事者達は容易にいとまごいが出来るため，「対面的かかわり」に対して大きく用心深くある必要はない。

一方，設問3の状況では，講義や講演は，その場の人々に対して一斉に行われるため，講義や講演の開始と終了は聴講者に同じタイミングで訪れる。この結果，聴講者間で起きた「対面的かかわり」は講義や講演の開始によって一度は中断されても，終了後に再び継続することになるため，彼らはいずれ，いとまごいの問題に直面することが予想される。この予想に従えば，「対面的かかわり」が起こることに用心深くなるだろう。設問4の状況で，待ち合わせ中に「対面的かかわり」が起きてしまった場合，約束の相手が来て待ち合わせが完了するまで，その「対面的かかわり」を中断する契機が訪れることはほとんどなく，いとまごいをする困難に直面することが予想される。待ち合わせ相手が来ない場合は，なおさら困難の度合いが増すことが予想される。このような困難を未然に防ぐため，待ち合わせ中であることをアピールし続けることが「対面的かかわり」が起きないようにするために有効であると考えられる。

設問3，設問4の状況では，一度「対面的かかわり」が起きてしまうと，会話から解放されるような強制的きっかけが乏しい環境であるため，「対面的かかわり」に用心深くなる人の割合が高くなると考えられる。つまり，「対面的かかわり」を強制的に中断できる機能を求める人の割合が高くなると推察され，その結果，「誰かとつながっていること」をアピールできるケータイを持ち出す頻度が高くなったと推察できる。

4.6 考察－「誰かとつながっている」ことのアピール

設問1，2，3，4における状況は「人が大勢いるところで，独りで待つ場面」であるため，「小物としてのケータイ」の利用は等しく有効であろう。ケータイは手元からすぐに取り出せて，暇つぶしが出来て，ディスプレイを見ることで周囲の人と視線をあわせなくて済む。ケータイの小型化と多機能性は，これらの要望を充分に満たすものである。しかし，設問3，4の回答結果は，設問1，2の結果以上に，大きな使用頻度を示している。設問3，4が描く状況において，被験者は「小物としてのケータイ」以上の役割を求めていると推察できる。設問3，4での使用頻度が高いことは，ケータイに，暇つぶしと顔を伏せるための道具以外の意味と役割を見いだしている者が少なからず居ることを意味している。彼（女）らは，ケータイが自らの人間関係や社会性をアピールできることを理解しながら，公共空間で「コミュニケーション端末としてのケータイ」を発展的に活用していると言える。

各設問が描く状況は，それぞれに空間的な状況が異なり，それがケータイを利用したくなる動機に影響していると考えられる。対面的かかわりへの影響や所用終了のタイミングだけが人々の行動に影響するわけでは必ずしもないだろう。が，公共空間において，周囲の人々およびそれらの人々との間に生じるかも知れないやりとりに対して，全く警戒感無し，ということも考え難い。支配的要因であるかどうかは不明であるものの，周囲の人々とのやりとりに対する警戒感が，公共空間に居る人の行動に何らかの影響を与えており，それがケータイ利用にも反映されていることは充分に考えられる。

本章の調査結果から，「ケータイのディスプレイを見る行為」には，場面や状況に応じて，その狙いや使用頻度に違いがあることが示された。被験者は，公共空間において，自らの周囲を観察し続け，時に「誰かとつながっていること」を顕示する必要性を感知しながら，場合に応じてケータイを演出的に取り出す傾向にある。このことが意味することは，ほとんどの人がケータイを持ち歩くようになった現代において，人々が自らの人間関係や社会性の存在を周囲にアピールすることが，いとも簡単にできるようになったことである。ケータイ利用者がこのような権能を得たことは，我々が現実空間で対面的に取り結ぶ人間関係においても，大きな影響を与えているのではないだろうか。

5. おわりに － 多重文脈性を「まとう」

5.1 非言語コミュニケーションツールとしての利用法

3章に述べたとおり，公共空間において「用もないのに」ケータイを取り出してディスプレイを見る行為をする理由を調査して分析した。公共空間では，「ケータイのディスプレイを見る行為」は，その利用の仕方が大きく2つに分かれることが分析結果より示された。従来から利用されていた小物としての利用法と，コミュニケーション端末としての利用法とに分類可能である。後者の利用法では，今ここに居ない「誰かとつながっていること」を非言語的にアピールしようとする意図が，得られた回答の表現から見られた。この利用法はケータイの出現により，新しく普及したものと考えられ，我々が対面的に直接行うコミュニケーションにおいて，新たな要素が加わったと見て良いだろう。

また，周囲の状況に応じて，ケータイを利用したくなるユーザの割合が変わることが4章の調査結果より示された。周囲の人々との「対面的かかわり」に対する警戒感をより感じやすい状況の方が，ケータイの利用頻度が高くなる傾向が見られた。このことから，少なくないユーザが，自らの人間関係や社会性を，ケータイを利用する行為でアピールしようとしていることが示唆される。また，状況に応じて利用頻度に差が出ること自体が，彼（女）らが，ケータイ使用の非言語的な効果を，状況

NII-Electronic Library Service

Japan Information-Culture Society

に応じて意図的に使い分けることが出来ることを示している。

2つの調査結果から，「ケータイのディスプレイを見る行為」は，ケータイを従来型の小物のように使用する場合と，「誰かとつながっている」ことをアピールする場合の，大きく2つに分けられることが示され，かつ，ユーザはこれらの利用法を状況に応じて活用していることが示された。このような利用法を使えることが，公共空間でケータイのある安心を感じさせる要因の一つになっていることは充分に考えられるだろう。意図的で非言語的なケータイ利用法が，本稿で調査した場面以外の状況で，どのように利用されているか，さらなる調査が必要である。

5.2　ケータイで多重文脈性を「まとう」

ケータイは多重文脈性を持つと言われる[6]。ひとつの限られた現実空間の出来事やコミュニケーションを成立させる状況，前後関係，背景をその現実空間の文脈とすると，多重文脈性とは，複数の現実空間に成立する文脈が関連し合って，お互いの文脈が絡み合うかのような複合的な現実を成立させるような新たな文脈を生じさせうる性質を指す。ケータイユーザが行う操作は現実空間でなされるものの，その場に居ない誰かとリアルタイムで会話することも，多くの人々に一斉にメールを出すことも，あるいはネットを経由してその場と全く違う複数の現実とやりとりすることも，ケータイユーザには可能である。つまり，自らが座する現実空間と全く違う空間から影響を受けることも可能であり，さらに，別の空間に影響を及ぼすことも出来る。ケータイを所有して持ち歩くことは，ケータイが実現する多重文脈性を利用可能な状態になることでもある。

が，本稿で取り上げてきたケータイユーザにとっては，ケータイは多重文脈性を「持つ」ものに留まらない。「誰かとつながっていること」をアピールするユーザは，ケータイが多重文脈性を「持つ」ツールであることを前提にして，その機能を持っている自分の姿を周囲に見せようとしている。ここでの利用法の場合，その時点での多重文脈性が実効的であるか否かは，その利用動機とほとんど関係がない。実際に他の空間とやりとりをしていなくても，それが可能である，そうしているかのようである，とアピールすることが目的となっている。つまり，多重文脈性を見せつけて自らの印象を演出しているのだ。このことは，多重文脈性を「まとう」ことがケータイによって可能になった，と言い換えることが可能だろう。

多重文脈性を「まとう」ことが可能であるのは，ケータイのディスプレイを見る行為に「目に見える2重の秘匿性」があるからである[4]。ケータイのディスプレイ内容は，周囲の者からはほとんど見えない上に，その使用者がリアルタイムでどこかに連絡しなければならない状況にあるのか，そうでないのか，周りからはほとんど判断がつかない。ケータイを使っていることは，周囲から容易に認識されるが，表示内容も使用の必然性もほとんど伺い知れないことが，ケータイのディスプレイを見る行為における「目に見える2重の秘匿性」である。本稿で取り上げてきたケータイユーザは，「目に見える」ことも「2重に秘匿的」であることも利用して，多重文脈性を「まとう」ことを実現している。

多重文脈性を「まとう」ことは，ケータイを所持するだけで可能になる。2つの調査結果に見るとおり，多重文脈性を「まとう」ことは，その場に居ない者との関係性を，あいまいながらも，現実空間で進行中のコミュニケーションに引き入れることでもある。国内でケータイの契約数が1億件を突破し，世界的にも30億件以上の契約数があると言われる現在，実に多くの人々がこのような権能を手にしている[13]。現代の対面的コミュニケーションにおいて，上で述べたような多重文脈性の「まとい」が，さらに新しい表現手段として，「ツール」化していくことが推察可能であり，今後の検証課題である。ケータイが普及して，「ケータイのディスプレイを見る行為」が日常の中に根付きつつある現代であるからこそ，ケータイが目の前にある現実空間のコミュニケーションについて，さらに注意深く考察を続ける必要がある。

注

(1)「コンテンツ」は，ケータイ画面上で操作して利用できる内蔵アプリケーションや配信されるページなどを指す。

(2)「携帯電話」という表記は引用した文献［3］での表記のままである。以降，1,2,4章のおける参考文献［3］，［7］の引用部分は文献の表記のままを用いる。

(3)「メール」はケータイを用いた電子メールを指す。以降同様。

(4) 本稿では「非言語」は，文字や音声を用いないノンバーバルなやりとりのことを指している。以降同様。

(5) 歩行中のディスプレイ凝視や照明をおとしたイベント会場における液晶装置の光の散乱などが，「ケータイのディスプレイを見る行為」の代表的な迷惑行為である。（モバイル社会研究所：『モバイル社会白書2006』より）

参考文献

［1］電気通信事業者協会 HP
http://www.tca.or.jp/japan/database/daisu/index.html

［2］ドコモ早わかり講座，NTT ドコモ公式 HP
http://www.nttdocomo.co.jp/corporate/ir/personal/quick/index.html

［3］モバイル社会研究所：『モバイル社会白書2007』pp.8-39,（2007）.

［4］中村隆志：「非言語コミュニケーションとしての「ケータイのディスプレイを見る行為」」，情報文化学会誌，14（1），pp.31-38,（2007）.

［5］岡田美佐：「ケータイをめぐる言説」，松田美佐，岡部大介，伊藤瑞子編，『ケータイのある風景』北大路書房，pp.1-24,（2006）.

［6］茂木健一郎，水越伸：「精緻で閉鎖的な日本のケータイ」，水越伸編『コミュナルなケータイ』，岩波書店，pp.6-22,（2007）.

［7］公開調査結果詳報，ヤフーバリューインサイト株式会社公式 HP
http://www.yahoo-vi.co.jp/research/00387.html

［8］FOMA（フォーマ）製品一覧，NTT ドコモ公式 HP
http://www.nttdocomo.co.jp/product/foma/

［9］「写真で解説する「F703i」」，ITmedia +D モバイル，2007年01月17日記事，
http://plusd.itmedia.co.jp/mobile/articles/0701/17/news012.html

［10］安川一：「〈共在〉というポルノグラフィ」安川一編『ゴフマン世界の再構成』世界思想社，pp.185-210,（1991）.

［11］吉見俊哉，若林幹夫，水越伸：『メディアとしての電話』，弘文堂，pp.104-141,（1992）.

［12］ゴフマン，E.：『集まりの構造』（丸木恵祐子，本名信行訳）誠信書房，pp.37-155,（1980）.

［13］「携帯電話，ついに世界普及率5割に到達」，日経 BPnet ITpro，2007年11月29日記事，
http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/NEWS/20071129/288379

NII-Electronic Library Service